

アウトドアブームで思わぬ遭遇

マムシ被害神戸で急増

今年すでに11件

登山やキャンプなど自然と触れあう機会が増える5〜10月ごろはマムシなど毒ヘビによる被害が起きやすく、注意が必要だ。神戸市立医療センター中央市民病院（同中央区）の救命救急センターでは、2020年以降、マムシに刺されてけがをした患者の受診が増加。同センターの松岡由典医師（40）は、新型コロナウイルス感染症の流行を踏まえ「密を避けるアウトドアブームなどで、接触する機会が増えているのかも」と推察する。

同センターが対応したマムシ被害の症例は、19年以前は年間2、3件程度だったという。だが20年7件、21年8件、22年は9月までに11件と、コロナ流行前と比べ急増した。今年も神戸市内から、大半が

北区だった。農作業や登山、キャンプ中の被害が多いが、学校の部室で遭遇し、追い払おうとした教員が刺された事例も。過去には、投擲用の動画撮影のためにマムシを持った4歳児が被害に遭ったケースもあったという。

72時間で腫れのピークを迎える。腫れの程度に応じて、必要な場合は抗毒素血清を投与して治療する。松岡医師は「かまれた場合、現場でできることはあまりない。安静を保ちながら速やかに医療機関を受診して」と話す。

医療現場への助言なども行う日本蛇族学術研究所（群馬県）によると、50歳以内で近寄らなければ、基本的に襲ってくることはなく、近づかないのが一番の方策という。気付かず踏んで脚をかまれることも多く、屋外では注意が必要

で唯一のヘビ専門展示施設「ジャパン・スネークセンター」のホームページでは、かまれた時の対応や相談先を案内する「毒ヘビ110番」を掲載している。

兵庫県内では、2017年にも伊丹市に住む当時小学5年の児童がかばんに入ったヤマカガシに複数回刺された事例もある。ヤマカガシの抗毒素血清をとりまとめる聖路加国際病院（東京都）救急部の一



毒ヘビに遭遇した際の注意点

- ヘビを見つけた時は近寄らない
- 駆除のためや好奇心から捕まえない
- かまれたら患部を清潔にし、安静を保ちながら病院を受診
- 毒を吸い出すのはあまり意味がなく、むしろ傷口が悪化するおそれがある
- 長い布などがあれば、傷口より心臓側を指が1本入る程度の強さで縛る
- 可能ならヘビの写真を撮って受診する



ヤマカガシも危険、死亡例も

奥にあり、浅くかまれた時には毒が入らないこともある。そのため「毒のないヘビ」と勘違いされることも多いという。臆病なため、人間から近寄らなければ攻撃してこない。

マムシと並んで注意が必要。ヤマカガシは山中や水辺などに生息。毒牙は上顎の

要な毒ヘビに、ヤマカガシがいる。マムシと比べると毒性が強く、毒が体内に入ると死の危険にさらされる。重症例は全国で年間1、2件程度だが、9月下旬には、六甲市で男性がかまれ

奥にあり、浅くかまれた時には毒が入らないこともある。そのため「毒のないヘビ」と勘違いされることも多いという。臆病なため、人間から近寄らなければ攻撃してこない。

9月25日には六甲市の山林で、男子高校生（16）がかまえたという。振り払っても離



さまざまな体色が存在するニホンマムシ（いずれもジャパン・スネークセンター提供）

ヤマカガシは山中や水辺などに生息。毒牙は上顎の

かまえた。振り払っても離

大副部長（35）は毒ヘビと判

受診を」と呼びかける。（小尾絵生）